

新しい時代を生き抜く資質・能力を育む音楽科の授業デザイン

— 根拠をもとに自分の思いや考えをもつ子どもの育成を目指して —

音楽科研究会議

研究員 寺瀬 想 (川崎市立梶ヶ谷小学校) 山本 美由紀 (川崎市立東生田小学校)

鈴木 桃子 (川崎市立枳形中学校) 石塚 倫世 (川崎市立生田中学校)

指導主事 伊藤 由佳子

I 主題設定の理由

小学校及び中学校学習指導要領(平成29年告示)解説音楽編において、音楽科の目標を実現するためには、感性を働かせ他者と協働しながら音楽表現を生み出したり、音楽を聴いてそのよさや価値等を考えたりしていくこと、我が国や郷土の伝統音楽に親しみ、よさを一層味わえるようにしていくこと、生活や社会における音や音楽の働き、音楽文化についての関心や理解を深めていく学習の充実を図ることが重要であるとされている。さらに、この音楽科の教科の目標は、表現及び鑑賞の活動を通して学習が行われることを前提とし、音楽的な見方・考え方を働かせた学習活動によって、生活や社会の中の音や音楽や音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成することを目指すことであることが示されている。

令和4年度の音楽科研究会議では、音楽的な見方・考え方を働かせる際に重要となる「音楽に対する感性」に焦点を当て、曲との出会いや思考の場を確保する手立てを講じた。その結果、児童生徒が他者と協働しながら音楽と向き合う姿が見られるなど、一定の成果を得た。一方で、〔共通事項〕の学習を通して、音楽を形づくっている要素をよりどころとして音楽の特徴を捉えることは定着しつつあるものの、「捉えた音楽の構造を根拠に、自分の表現や音楽の価値を導き出す」といった、思考の深化へのつながりに課題が残った。

また、令和6年12月中央教育審議会「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方(諮問)」においては、顕在化している課題として「自分の考えをもち、根拠に基づいて他者に明確に説明すること」や「自律的に学ぶ自信がある児童生徒が少ないこと」が挙げられた。

これらを踏まえ、本研究会議では、激動する社会の変化に対応し、人生を豊かに切り拓く力を音楽科でどのように育成すべきかを検討した。児童生徒が主体的に学習に向かい、根拠をもとに自らの思いを形成し、新たな考えを生み出すためには、題材の学習過程そのものの質的向上が不可欠である。そこで、学習内容や活動を「児童生徒の立場」から見直し、一人一人の内面的な変容に着目した授業デザインを構築するため、主題を「新しい時代を生き抜く資質・能力を育む音楽科の授業デザイン」副主題を「根拠をもとに自分の思いや考えをもつ子どもの育成を目指して」と設定し、実践・検証を行うこととした。

II 研究の内容

1 研究の視点

(1) 音楽科の学習についての省察

これまでの授業実践を振り返り、児童生徒の学びの姿について、表1のとおり分析した。この分析から、多くの授業において〔共通事項〕の学習を位置付けることで、主な音楽を形づくっている

表1 音楽科の授業実践における児童生徒の学びの姿の分析

①相当数の児童生徒ができてること ・歌唱において、旋律の特徴を聴き取ったり楽譜から読み取ったりして音楽の構造を理解すること。 ・器楽において、リズムなどの特徴や各声部の役割を理解すること。 ・音楽づくり(創作)において、リズムの組合せの特徴などを理解すること。 ・鑑賞において、音楽の特徴を捉えて聴くこと。
②課題があると考えられること ・表現において、音楽表現の工夫について、知覚・感受したことを根拠として、言葉で表すこと。 ・鑑賞において、曲のよさや美しさについて感じ取ったことと曲全体の構造とを関わらせて言葉で表すこと。

要素を聴き取ったり（知覚）、そこから生まれる雰囲気を感じ取ったり（感受）する力は、着実に育まれていることが確認できた。しかし、それらを「根拠」として、自らの表現意図（「こう表現したい」）を形成したり、音楽の価値（「音楽のよさや美しさ」）を見いだしたりする思考の深まりについては、依然として課題が残っている。また、個別の音楽的要素への気付きが、曲の構成や展開といった「全体の構造」と有機的に結び付いていない実態も浮き彫りになった。児童生徒が、部分的な特徴の指摘に留まらず、曲全体を俯瞰し、要素同士の関わりの中から自らの表現意図や音楽のよさや美しさとして捉え直すための学習プロセスの再構築が必要であると考えた。

（２）音楽科の学習を通して育成を目指す資質・能力

本研究会議では、激動する社会の変化に対応し、人生を豊かに切り拓く力を音楽科でどのように育成すべきかを検討し、目指すべき資質・能力を「自ら判断し、表現する力」「生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる力」「生涯にわたって音や音楽と親しむ姿勢」と定義した。これらの育成に向けては、「主体的・対話的で深い学び」の実現を通じ、「生涯にわたって主体的に学び続け、多様な他者と協働しながら、新たな価値を創造したり、生活を豊かに彩ったりしていく力の基盤」を築くことが不可欠である。特に、音楽的な見方・考え方を働かせ、根拠をもって自らの思いや考えを形成する経験が、不確実な社会において自律的に歩む力の源泉になると考えた。

（３）研究の見通しと具体的な手立て

音楽科における思考は、音や音楽といった素材を扱って思考する点に特徴があり、学習者自身が自分の感覚器官を使って直接音や音楽に働きかけて思考することが重要である。このような音楽的思考をはじめ、音楽科の学習において、題材を構想する際に考慮すべき点は多様である。本研究会議では、このうち、前述した本市の児童生徒の実態を踏まえ、本研究会議が目指す「根拠をもとに自分の思いや考えをもつ」ため、これまで見えにくいとされてきた「音楽的思考」に焦点を当て、学習のプロセスを表2のとおり表した。

表2 根拠をもとに自分の思いや考えをもつための学習のプロセス

ア	音楽と出会う（音楽と出会い、表現や鑑賞の課題をもつ）
イ	追求する（音楽の要素を知覚・感受し、試行錯誤を繰り返す）
ウ	深める（他者との対話や比較を通して、自分の考えを練り上げる）
エ	自覚する（学びの変容を振り返り、自身の成長や次の課題を認識する）

この4つのプロセスを児童生徒が「根拠をもとに自分の思いや考えをもつための学習のプロセス」とし、さらに授業を実践する上で、教師が授業をデザインするために、表3のとおり方策を考えた。この3つの方策により、音楽的特徴と自分の思いを結び付け、対話を通じて考えを更新できると仮説し、以下、この方策がどのように児童生徒の変容につながったかを実際の授業を振り返りながら述べていく。

表3 教師が授業をデザインするための方策

方策	具体的なアプローチ	期待される効果
方策Ⅰ キーワード・バンクの活用	音楽を形づくっている要素とそれらに対応する語彙を可視化し、思考の「手がかり」として蓄積する。	根拠となる要素を言葉で捉え直すために自らの判断で活用する。
方策Ⅱ 対話的プレゼンテーション	言葉による説明だけでなく、楽器による実演や比較を交えた対話を通じ、自身の思考を客観視し、他者の視点を取り入れる。	他者との関わりを通して、自らの考えを客観視し、確かなものにする。
方策Ⅲ 学びの自己調整	活動の中盤に、振り返りと修正のための場を意図的に設け、自律的に表現や考えを更新させる。	児童生徒が自ら学習を調整しようとする。

2 研究の実際（授業実践）

（1） A小学校 第3学年

題材名「せんりつのとくちょうをかんじとろう」 A表現歌唱 B鑑賞

思考・判断のよりどころ「旋律」 教材「うさぎ」「とどけようこのゆめを」「メヌエット」「ふじ山」

① 本題材の特徴と児童の実態

本題材では、音楽を形づくっている要素のうち、「旋律」に着目して学習を進めた。歌唱教材「とどけよう このゆめを」は、「旋律の形（上がっていく、下がっていく、同じ音が続く）」という音楽の構造を捉えるのに最適な教材である。この時期の児童は高学年の響きのある歌い方へのあこがれも強くなり、高い音と低い音のそれぞれの発声に気を付けて歌うといった身体的な感覚と旋律をつなげやすい。これは、本研究の「根拠（要素）と思い（表現）」の結びつきを育む第一歩として整理し、検証した。

② 各プロセスにおける具体的な方策

設定したプロセス（ア～エ）に基づき、表4のとおり具体的な方策を講じた。

表4 A小学校研究員の各プロセスにおける具体的な方策

プロセス	教師の取った方策と発問	児童の姿
ア 音楽と出会う	<p>方策Ⅰ：キーワード・バンク 聴き取ったことや感じ取ったことを共有する際、様々な要素に着目する中で「旋律」に着目した児童の発言があった。ここで、クラス全員が「旋律」について捉えられるよう、楽譜を指や鉛筆でなぞったり、音の高さを表した「ドレミ風船」に合わせて手を動かしたりする活動を取り入れた。その際に出た児童の意見は、キーワード・バンクとして残した。</p> <p>【教師の発問】 〇〇さんは、旋律を指でなぞっていたから上がったたり下がったりしたことがわかったようです。皆さんが旋律について聴き取ったことはどんなことですか。</p>	<p>旋律の上がり下がりが多い 旋律がジャンプしている 旋律の音の動きが階段になっている</p>
イ 追求する	<p>方策Ⅰ：キーワード・バンク それぞれが考えた「とどけようこのゆめを」の旋律に合う歌い方を全体で共有する場面では、児童の発言をキーワード・バンクとして板書に整理し、それらを音で試し、クラスみんなで考えることを重視した。</p> <p>【教師の発問】 「旋律が上がっていく」ところは、わくわくしたのですね。皆さんはどんな気持ちになりますか。</p>	<p>元気がわいてくる わくわくする そらに届きそう 希望いっぱい 盛り上がる</p>
ウ 深める	<p>方策Ⅱ：対話的プレゼンテーション 「とどけようこのゆめを」の旋律に合う歌い方を考える場面で、自分が考えやすい場所や姿勢等を自由に選ぶことを伝えた。また、好きなタイミングで友達と考えや思いを共有する場を設けるように伝えた。</p> <p>【教師の発問】 この曲の特徴がわかってきましたね。あなたはどんな声で、どのように歌いたいですか。</p>	<p>「遠くに届くような明るい声 で歌いたい」 「だんだん声を強くしてわく わくするように歌いたい」</p>
エ 自覚する	<p>方策Ⅲ：学びの自己調整 「旋律」をよりどころとして思考している児童の発言を価値付けたり、既習を想起する児童の発言をキャッチしたりし、全体の学習へとつなげた。さらに、友達の見解を参考に音で確認する場を設けたり、自分の思いや考えが変わった様子をキャッチしたりして、その都度価値付けた。</p> <p>【教師の発問】 〇〇さんの意見をみんなで試してみましょう。〇〇さんの表現と逆の表現ではどうなりますか。</p>	<p>「前回やった気がする、うさぎ とか獅子舞とか」 「のばす音符を無視しちゃっ ているよ。雰囲気をこわしちゃ っている」</p>

③ 児童の発言や記述の分析

プロセスを経て、「とどけようこのゆめを」をどのように歌いたいか、各自が自分の思いを表現した。その際の記述・発言を分析した（次頁表5）。

④ 教師が講じた方策による児童の姿の考察

方策Ⅰ：「キーワード・バンク」の活用

表5 A小学校の児童の発言や記述の分析

児童の記述・発言	分析
「とどけようこのゆめを」のところで前の部分と感じが変わってなめらかになるし、ここの旋律が階段のように上がっているから、夢が空まで届くように、だんだん声を明るくして歌いたい。	自分の思いが、曲全体の構成と旋律の形と歌詞の内容を根拠にしてつながっている。
アの部分は、旋律が上がったり下がったりしているから、元気に歌う。元気だけ高い音をきれいにだすように気をつけた。	アの部分の旋律の形に気付いており、それを根拠に「元気」に歌いたいという思いをもつことができている。
楽しく歌いたい、高い音が出せるようにしたい	個人の感想や技術的な成功のみで、旋律の特徴（根拠）に触れていない。

自分たちが見つけた音楽に関わる言葉で、自らの思考を言語化・具体化し、音楽的な語彙を豊かにする上で、「キーワード・バンク」は極めて有効であった。本学級では、年度当初より「みんなで見つけた音楽の言葉」(図1)を掲示しており、各プロセスの場面において、児童がこの掲示をよりどころに自らの思いを具体化させる

姿が見られた。一方で、活用が困難な児童に対しては、個別的な支援の在り方に課題が残った。

方策Ⅱ：「対話的プレゼンテーション」

自分の考えを他者に伝える場では、思考し、判断・表現する段階になるため、その場の思いつきの考えや思いで発言するような内容では意味がないことが明確になる場面となった。学習のプロセスの中で、児童が効果的な対話的プレゼンテーションを行うことができる段階を教師が見極めることは非常に重要である。また、児童がその活動に必然性をもっていることが条件であることも明確になった。

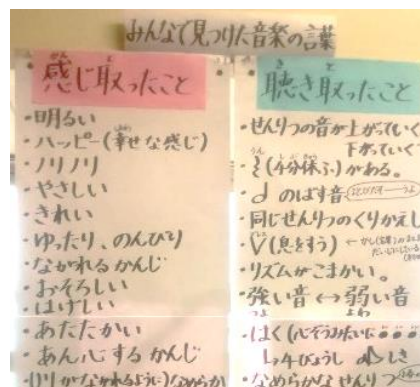


図1 A小学校キーワード・バンク

方策Ⅲ 「学びの自己調整をする場の設定」

それぞれが考えた「とどけようこのゆめを」の旋律に合う歌い方を学級全体で共有する場面において、児童の発言を音で試し、学級全体で考えることを大切にしました。その際、発言した児童の考えとは逆のパターンを歌い試したり、既習曲と歌い比較したりする活動を取り入れた。この手立てにより、表現や曲のよさの輪郭がはっきり見え、児童にとって分かりやすいものとなった。「夢が空まで届くように『元気に大きな声』で歌いたい」と表現した児童が、旋律の形に気付くことで明るい声へと変容した姿は、本研究の主題を象徴する成果であると考えられる。

(2) B小学校 第6学年

題材名「詩と音楽との関わりを味わおう」 A表現歌唱 B鑑賞

思考・判断のよりどころ「旋律」 教材 「花」「箱根八里」「荒城の月」「ふるさと」

① 本題材の特徴と児童の実態

本題材では、音楽を形づくっている要素の「旋律」をよりどころとして鑑賞及び表現の学習を進めた。高学年の児童は、曲の表情や雰囲気、様々な音楽を形づくっている要素や歌詞の内容と関わらせて捉えようとする傾向が見られる。このことから、歌唱教材「ふるさと」で、「曲の構造(構成・旋律の対比、2声の関連)」と「自分の思い・表現」を繋ぐ手立てについて検証した。

② 各プロセスにおける具体的な方策

設定したプロセス(ア～エ)に基づき、次頁表6のとおり具体的な方策を講じた。

表6 B小学校研究員の各プロセスにおける具体的な方策

プロセス	教師の取った方策と発問	児童の姿
ア 音楽と出会う	方策Ⅰ：キーワード・バンク 音楽を形づくっている要素を精選せずに、各自が自由に曲の特徴を捉え、教科書の楽譜にメモをした。 【教師の発問】 この曲の特徴として気付いたことは何ですか。	上がる、下がる、高い低い、細かい、強弱があまりない、なつかしさ、ふるさと
イ 追求する	方策Ⅰ：キーワード・バンク 「旋律」をよりどころとしている児童の発言をもとに、全体で旋律を確認した。その内容を教師が板書し、その後の学習でキーワード・バンクとして活用した。 【教師の発問】 この曲は、みんなで捉えたように、大きく分けると1・2段目・3段目・4段目の3つに分けられることが分かりましたね。3段目の旋律の動きには、1・2段目と比べてどのような特徴がありますか。	強い決意、遠くを思う気持ち、あふれ出す感情、広がる景色、山、上がる、すごく上がる、4段目に向かって下がる、同じ(違う)動き、追いかけて、合流
ウ 深める	方策Ⅱ：対話的プレゼンテーション 3段目をどのように歌いたいのか、自分の思いや意図をもつために、各自の意見を共有しながらグループで歌い試した。その際、曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わりについて理解したことを根拠に考えるように促した。 【教師の発問】 旋律と歌詞の内容との関わりでわかったことをもとに、あなたは3段目をどのように歌いたいですか。	Bの部分は2つ目のフレーズまではだんだん強く歌って最後のフレーズの最後でやわらかく消えるように歌いたい。
エ 自覚する	方策Ⅲ：学びの自己調整 対話的プレゼンテーションを通して、他者と意見を十分に共有・共感した後、改めて自分はどうのように歌いたいのか、表現意図を考えるブラッシュアップタイムを設けた。 【教師の発問】 友達の考えも参考にして、改めて「ふるさと」をどのように歌いますか。	3段目は旋律も上がっていったんどんどん盛り上がる曲の山の部分だから、だんだん強くソプラノとアルトが一体となるように歌いたい。4段目ではまた1・2段目のリズムに戻るの、ふるさとを思い出そうようにやさしく歌いたい。

③ 児童の発言や記述の分析

プロセスを経て、「ふるさと」をどのように歌いたいのか、各自で自分の思いや意図を表現した。その際の記述・発言を表7のとおり分析した。

④ 教師が講じた方策による児童の姿の考察

方策Ⅰ：「キーワード・バンク」の活用

聴き取ったことと感じ取ったことを関連付ける教師の促しにより、音楽的根拠に基づいた発言が増えた。前時の記録を可視化することで、児童は既習内容を根拠に表現の工夫に継続して生かせるようになったと考える。

方策Ⅱ：「対話的プレゼンテーション」

従来の自分の意見を読み上げる姿から、他者の意見や歌い試したことを取り入れた対話へと変容した。対話を通して自分の考えを更新し、納得感のある表現意図をもつ姿が見られた(図2)。

方策Ⅲ 「学びの自己調整をする場の設定」

「忘れられないという気持ちで歌いたい」と発言していた児童が、ブラッシュアップタイムを経て、「3段目は音程も上がっていったんどんどん盛り上がる曲の山となる部分だから、だんだん強くソプラノとアルトが一体となるように、4段目ではまた1・2段目のリズムに戻るの、ふるさとを思い出そうようにやさしく歌いたい」と具体的な工

表7 B小学校の児童の発言や記述の分析

児童の記述・発言	分析
「3段目(B)は音が跳ね上がるように高くなり、一番の山場になっている。ここは夢を叶えようとする強い決意を感じる。だから、ここに向けて少しずつエネルギーをためて、一番豊かな響きで歌いたい。」	曲全体の構成や要素、歌詞の内容と思いや意図が、全体の流れの中で繋がっている。
「3段目は高い音が出てくるから、遠くの山を思い出す。だから、遠くまで届くように声を大きくする。」	旋律が高いといった部分的な要素と思いや意図が繋がっている。
「心を込めて歌いたい。」「懐かしい感じがした。」	主観的な感想のみで、音楽的な根拠への言及がない。



図2 B小学校 自分の考えを更新する記述

夫へと考えを更新させた姿が見られた。また、毎時間必ず授業の最後に振り返りを行うというスタイルを変え、児童が学習の振り返りを必要とした時を教師が見極め、振り返りを実施した。授業の途中で振り返りの場を設定したことで、考えをその時間内に即座に自分の表現へ反映させる自己調整の姿が顕著に見られた。

(3) C中学校 第2学年

題材名「アルトリコーダーの音色や響きと奏法との関わりを理解し、曲想にふさわしい表現を工夫してリコーダーアンサンブルをしよう」 A表現器楽 4時間扱い

思考・判断のよりどころとなる主な音楽を形づくっている要素 「旋律」「音色」

教材 「ラバーズ・コンチェルト」

① 本題材の特徴と生徒の実態

本題材では、リコーダー奏者のゲストティーチャーによる範奏や体験を通じ、奏法と「音色」の関係を実感を伴って理解することを行った。教材「ラバーズ・コンチェルト」を用いた学習では、単なる技術の向上に留まらず、旋律の構造を理解し、それに適した音色(息の質)を自律的に選択する活動を重視した。曲全体の構成を踏まえ、音楽的な根拠(旋律や音色)に基づきながら、生徒自身が試行錯誤して表現意図をもつことを目指した。

② 各プロセスにおける具体的な方策

設定したプロセス(ア～エ)に基づき、表8のとおり具体的な方策を講じた。

表8 C中学校研究員による各プロセスにおける具体的な方策

プロセス	教師の取った方策と発問	生徒の姿
ア 音楽と出会う	<p>方策Ⅰ：キーワード・バンク ゲストティーチャーの演奏による6種類のリコーダーの演奏の聴き比べを通じ、アルトリコーダー固有の音色を知覚・感受した。音と直接関わり、比較することで、音楽的な思考を促すことをねらった。</p> <p>【教師の発問】 アルトリコーダー以外と比べて、アルトリコーダーらしい音色の特徴は何ですか。</p>	<p>「高いリコーダーより太く温かい」「低音は木のぬくもりがあって、息を多く使っている」</p>
イ 追求する	<p>方策Ⅰ：キーワード・バンク 楽曲の構成や旋律の絡み合いを分析し、それに応じた「音色(息の質)」を自律的に選択する活動を行った。試行錯誤の過程を楽譜にメモするように促し、思考の可視化を図った。</p> <p>【教師の発問】 各部分の旋律の関わりを考えて、各部分にふさわしい音色はどのような音色ですか。</p>	<p>「2段目は2声の掛け合いが活発になるので、明るくエネルギーのある響きにしたい」 「4段目は曲の終わりにかかっていくので、余韻を大切にしたい温かみのある優しい音色で吹きたい」</p>
ウ 深める	<p>方策Ⅱ：対話的プレゼンテーション 楽曲の構成を踏まえた表現意図をもつため、ペアで意見を共有しながら吹き試す活動を行った。単なる技術練習に留まらぬよう、教師は「音色」と「旋律」の根拠を意識させる問い返しを行った。</p> <p>【教師の発問】 ○○さんの意見のように、2声の響きを「際立たせる」か「溶け合わせる」か、曲の流れから考えるとどちらがよいですか。</p>	<p>「1・3段目は和音の美しさを生かすために落ち着いた音色で」「2・4段目は掛け合いを生かすため明るくはつらつとした響きで」</p>
エ 自覚する	<p>方策Ⅲ：学びの自己調整 適切な振り返りの場として、改善点を即座に練習に反映させたり、他者の表現を取り入れて思考を更新させたりする場を設定した。また、中間の発表会を通じ、自立的な学びの変容を促した。</p> <p>【教師の発問】 自分たちは、どのように演奏の課題を解決しましたか。</p>	<p>○○さんペアと交流し、息の質を変えることとタンギング(du/tu)の使い分けという具体的な方法に気付いた。</p>

③ 生徒の発言や記述の分析と評価

プロセスを経て、「ラバーズ・コンチェルト」をどのように演奏したいか、各自が自分の思いを表現した。その際の記述・発言を次頁表9のとおり分析した。

④ 教師が講じた方策による生徒の姿の考察

方策Ⅰ：「キーワード・バンク」の活用

提示された仲間の言葉を、自己のイメージを具体化する手掛かりとして活用する姿が見られた。教師の

表9 C中学校の生徒の発言や記述の分析

生徒の記述・発言	分析
「曲全体が1段目と3段目は同じ、2段目と4段目はほぼ同じだけど、少し曲を変化させる旋律という構造になっていて、2段目からは2声が掛け合う。この変化を強調するため、2段目では息のスピードを速めて輝かしい音色にし、最後の2小節で冒頭よりもさらに優しく息を送り、2人の音を一つに溶け合わせるようにしたい。」	曲全体の構成と旋律の動き、それに伴う音色の変化が、一貫したストーリーとして繋がっている。さらに、2声のアンサンブルをどう演奏するのか、思いや意図をもっている。
「1・3段目の部分は高い音が多いから、音色を明るくするために、息の強さを強めた。最後は終わる感じなので、相手をよく聴いて速度と強弱を合わせて、曲が終わるように息の流れを優しくした。」	曲全体の構成を理解し、旋律の特徴に基づいた具体的な息のコントロールを意識している。相手をよく聴く技能を開かせて思いや意図をもっている。
「2声で音を合わせるのが難しかったけど、きれいに吹けた。」	部分的な技術や感想に留まり、曲全体の構成を根拠とした判断が見られない。

問い返しにより、漠然とした感想から「旋律の動き（音楽の特徴）」と結び付いた根拠ある思考へと深化し、新たな気付きを得る姿が確認できた。

方策Ⅱ：「対話的プレゼンテーション」

ペアでの対話と試奏（図3）を通じ、微妙なニュアンスの違いを調整することで表現をより具体化・更新させる姿が見られた。部分的な旋律の理解に留まらず、曲全体の構成を根拠とした判断へと変容した。

方策Ⅲ：「学びの自己調整をする場の設定」

部分的・反復的な練習に終始していた生徒に対し、前後のつながりを意識させる発問を行うことで、曲全体を見通した具体的な表現意図が生まれた。また、振り返り後に再度吹き試す時間を確保したことで、課題を自覚し、自律的に調整しようとする姿勢が定着した。



図3 C中学校 対話と試奏の様子

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究の成果

本研究では、「根拠をもとに自分の思いや考えをもつ子どもの育成」を目指し、学習プロセス（ア～エ）と3つの方策を軸に授業デザインを構築した。各校の実践・検証を通して、以下の成果が得られた。

（1）音楽的な語彙の蓄積と「知覚・感受」の連動（方策Ⅰ：キーワード・バンクの有効性）

「キーワード・バンク」による語彙の可視化により、音楽を形づくっている要素とそこから生まれる雰囲気や表現意図を結び付ける姿が見られた。特に、低学年では身体感覚と言葉をつなげ、高学年・中学校では楽曲全体の構成と言葉をつなげることで、「なんとなく」ではなく「旋律が上がっているから」「対比があるから」といった音楽的特徴を根拠とした発言や記述が顕著に見られた。児童生徒が音や音楽から感じ取ったこと（感受）と、音楽的な特徴を聴き取ること（知覚）を学習の中で往還することで、自分の思いや意図や音楽のよさや美しさを味わうことへとつながる。これは生涯にわたって音楽と主体的に関わり続ける基盤となると考える。

（2）他者との協働による思考の客観視と深化（方策Ⅱ：対話的プレゼンテーションの有効性）

自分の思いを単に発表するだけでなく、実際に「音で試す」「比較する」活動を伴う対話を取り入れたことにより、自分の考えを客観的に捉え直す姿が見られた。友達の演奏や考えに触れることで、自分の表現意図との差異に気付き、音楽の構造に基づいた説得力のある判断へと高まった。時間とともに消えゆく音楽において、他者との対話や試行錯誤からその時の「最適解」を創出することは、今後の人生において異なる感性を尊重し、共に新しい価値を創る資質を養うものと考えられる。

（3）自律的な学習者としての変容（方策Ⅲ：学びの自己調整の有効性）

授業の終盤だけでなく、活動の途中に振り返りや修正の場を位置付けたことで、自らの思考を客観視し、必要に応じて修正・改善していくといった、自らの学びを更新する「自己調整」が促された。既習事項や他者の意見を柔軟に受け入れ、技能と表現意図が一体となった学習が実現した。学習を通して培った自己調整力は、学校教育後も自律的に音楽文化を継承し、学び続けるための重要な能力となると考える。

2 今後の課題

(1) 「曲全体」を捉える視点のさらなる定着

本研究では、教師の意図的な支援により、児童生徒が曲全体を見通した表現意図をもつ姿を確認できた。今後は、児童生徒が曲の部分的な特徴に留まらず、それらが曲全体の中で果たす役割を自律的に実感することが課題である。曲全体の中でどのような部分なのかを常に意識する俯瞰的視点をもつために、例えば曲の盛り上がりや場面の切り替わりを意識することができる教材の提示や発問などのさらなる工夫が必要である。

(2) 個別最適な学びを支える支援の在り方

自分のペースで思考を深める時間を確保することができた反面、思考をしたり、知識や技能を習得したりすることに時間を要する児童生徒に対しての具体的な支援が課題となった。すべての子どもが「根拠」を見付けられるよう、思考をゆさぶるヒントの出し方や、無理のないスモールステップの設定について、さらなる検討が必要である。

(3) 音楽的な思考を生涯の学びにつなげる汎用性の検討

本研究で培った「根拠をもとに思考・判断・表現する力」の授業内の変容を一過性で終わらせず、児童生徒が生活や社会、音楽文化の中にある多様な音や音楽と関わる際にも発揮できる「生涯にわたって音楽と親しむ資質・能力」として、いかに日常の学びに定着させていくかが今後の課題である。例えば、学校行事や他教科等の学習において音楽的な思考を働かせる機会を意図的に設けることや、自らが愛好する音楽を構造的な視点から捉え直して、その価値について根拠をもって共有し合う活動など、学習した視点を実生活へつなげていくための具体的な手立てについて、さらなる検討が必要である。

3 おわりに

社会が複雑化し、多様な価値観が共存する現代において、音楽科が担う役割は単なる演奏技術の習得に留まらない。音楽的な思考の、聴き取ったり（知覚）、感じ取ったり（感受）を基盤としながら、他者との対話や自己調整を経て紡ぎ出される「自分自身の音楽的な見方・考え方」を働かせることができるようにすることこそが、新しい時代を生き抜く子どもたちにとって最も価値のある資質・能力の育成につながる。ことが本研究で明確になったと考える。本研究を通して、児童生徒が自分の思いと音楽的な根拠を結びつけるプロセスは、単なるスキルの習得を超え、「音楽を愛好する心情」や「人生を豊かにする力」へとつながることを再確認した。今後も、音楽科が「新しい時代を生き抜く力」を育む中核的な役割を担えるよう、児童生徒一人一人の内面的な変容を大切にしたい授業改善に努めていきたい。

最後に、研究を進めるに当たり、ご支援、ご助言をいただきました先生方、また、研究をご支援いただきました研究員所属校の校長先生をはじめとする教職員の皆様に、心より感謝し厚くお礼を申し上げます。

【指導助言者】

川崎市立小学校音楽教育研究会 会長（川崎市立梶ヶ谷小学校長） 近清 えり子 先生

川崎市立中学校教育研究会音楽科部会 部会長（川崎市立白鳥中学校長） 千葉 葉子 先生